
落下の先

からなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落下の先

【コード】

N6882F

【作者名】

からなし

【あらすじ】

落ちる、落ちる、落ちる、落ちる。その先にあるものは。

穴がある、と君が言ったから、入ってみたくなくなった。
中を覗くと闇が満ちているだけで、恐怖の他には何もなかった。
空を見上げれば、空虚な青が果てしなく広がり、僕を見下ろしている。

これよりはマシかな、となんとなく思った。

それでも穴の淵で躊躇していると、後ろから君に思いきり蹴飛ばされた。

危ないな、と言おうとしたら、君はもう遙か遠く、豆粒程度の点になっっていた。

居心地の悪い浮遊感を感じ、昔君と行った遊園地で乗った、海賊船を模した乗り物を思い出した。

そういえば、あの遊園地は今頃どうなっているのだろうか。ひたすら錆びれたジェットコースターが、危うい、悲鳴にも似た音を発していたのを思い出すと、残骸だけを残して、子供の笑い声はもう聞こえないのだろうかと思った。

大して悲しみはない。ただ少し、切なさを感じた。

もうそろそろ、絵の具の青をそのまま塗りたくったような空も見えなくなってきた頃、僕は浮遊感も恐怖も忘れて闇に包まれた。

何も見えないのはいつもの事で、むしろ常に見る事を恐れていた。見えてしまえば現実だ。だが、見なければ存在しないのと同じだった。

僕は自ら見ることを避け、また見られることも避けた。

存在を認められないのは少し寂しかったが、それでも毎日を安心して過ごせた。

朝より夜の方が好きだった。月明かりで暮らした。それで十分だった。

穴の中をひたすら落下しながら、ふと終着地点を思った。周りは闇ばかりで実際にはよく分からないが、きっとスピードは大変なものだろう。

僕は死ぬのだろうか。

見なければ存在しないのと同じだ。自分で望んだことでもあるし、それでもいいと思った。

君は僕を殺したけれど、きつと僕を救ったのだ。感謝のひとつもしようではないか。上を見上げると、もうあの安っぽい色は見えなかった。

空の青は君の存在と一緒に消えた。

僕は下に向き直って終わりを待った。

闇の底を覗いた。

待っていた終着地点は青だった。途方もなく広がる、久しぶりの空だった。

僕はそれを仰ぎながら、ああ、地球の裏側に繋がっていたのか、となんとなく思った。

悲しみはなかった。切なさもなかった。

僕は穴の淵に立っている。

中を覗くと、ただ闇が満ちているだけ。

最初と何か変わったことと言えば、君がいないことと、あとひとつ。

空が綺麗だと思ったんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6882f/>

落下の先

2010年12月3日00時25分発行